

による成層圏からの降水量が翌年春に極大となるためであろう。

1969年4月以降、降水物および1雨ごとの $^{89}\text{Sr}/^{90}\text{Sr}$ 比を測定している。その結果、第10回核実験（水爆）1か月後の10月末に、対流圏降水物によるものと推定される $^{89}\text{Sr}/^{90}\text{Sr}$ 比の極大が観測され、その後急激に減少した。また1790年1月から4月まで $^{89}\text{Sr}/^{90}\text{Sr}$ 比は再び増加を示した。これは明らかに成層圏からの降下を示している。

347. 三宅泰雄（東教大理）島田利夫，川村 清（気研化学）：中国核実験の東京における降水および水蒸気の ^3H 濃度への影響

中国は1969年9月29日に大気圏核実験を行なったので、われわれはその前後、東京で降水および大気水蒸気を採取し、これらに含まれるトリチウム（ ^3H ）を測定した。核実験に伴う放射性物質の大部分は成層圏に注入されたためか、実験直後の ^3H 濃度の増加は観測されなかった。

348. 神山恵三，根本 修（気研応用）：登山中における紫外線照射と皮膚反射スペクトルの変化

高山における多量な紫外線照射とそれによる皮膚の反射スペクトルの変化は、紫外線の生気象学的評価ならびに高山などにおける療養効果を知る上で重要な情報である。われわれは、白馬、穂高、烏帽子、槍、穂高等に登山する登山家一人一人に、高分子化合物のテストピースをつけ、一人一人が一行程中どのくらい紫外線を受けるかを測定し、その量と登山前後の皮膚反射スペクトルならびに、それより、三刺激値を測定した。

$8 \times 10^8 \text{ erg/cm}^2$ 以上の積量がないと十分な反射スペクトルに影響が見出されなかった。

349. 高橋喜彦（高層気象台）：体温リズムの新しい見

方

昨秋ヨーロッパへ飛んだときの北極ルートの往復のルフトハンザ機上において私は、他のルートでは見られぬ特別な昼夜の経過を体験し、それにとまなう体温の変化を測定した。体温が人体活動の目安だとすれば、1. 人体活動は太陽（高度に関係なく）によって強められる。2. 飽和に達したのちはきわめて徐々に弱まり、最少に落ちつく。3. この太陽の作用は固い地球によってのみ遮られる。以上を仮定することによって、上記の北極ルート上における体温変化、さらに平常の体温リズムをも説明することができそうだ。

350. 高橋喜彦（高層気象台）：不快指数についての二つの註解

1. 不快指数は一種の体感温度で、その数字は華氏の温度を示すことに気付くならば、わが国ではこれをセツ氏の温度になおしてつかうべきである。2. 不快指数の計算式は $(t_d + t_w)/2$ と t_0 とを加重比0.8:0.2をもって平均することと同等である。 t_d , t_w は、乾、湿球温度。 t_0 は 24°C (80°F)なる定数で、これは水泳の最適水温にはほぼ一致する。このことは、人間が外気温に対してある程度鈍感なところもあることを示し、人によっては、その加重が大きくなりつつもあろう。

351. 永田四郎（奈良教大）：古文化財を収蔵する建物内の気象状態（3）

わが国の古文化財の保存には、特に湿度関係が重視されているが、適量の水分、湿度が必要であると考え。今までに調査した奈良の古い寺堂、倉蔵や収蔵庫等の中の湿度の現状を例示し、古文化財の保存と関連して幾つかの問題、たとえば「吸放湿」「高・低湿状態」などについて考えてみる。

東レ科学技術賞候補者推薦について

財団法人東レ科学振興会より、下記のように、**11月14日締切**にて当学会会で推薦依頼がありました。推薦希望の会員は至急担当常任理事北川信一郎（浦和市下大久保 255 埼玉大学理工学部、郵便番号 388、電話 0488-32-2111）宛に連絡下さい。

- | | |
|--------|------------------------------------|
| 候補者の対象 | (1) 学術上の業績が顕著なもの |
| | (2) 学術上重要な発見をしたもの |
| | (3) 重要な発明をして、その効果の大きいもの |
| | (4) 技術上重要な問題を解決して技術界に貢献するところが大きいもの |
| 科学技術賞 | 1件につき本賞：金メダル 副賞：250万円（2件以内の予定） |